

Title	文瀾學報(浙江省立圖書館出版)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.2 (1937. 6) ,p.160(324)- 161(325)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0162">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0162</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る事件であつたばかりでなく、朝鮮支那兩國に於ても重大なる影響を與へたものであることは言ふまでもない。國內に於ける此戰役失敗の影響は各方面に表れ、引いては豊臣家滅亡の一因をなし、朝鮮に於ては政治及び社會の革新を生ぜしめ、支那に於ては明朝の衰亡を早めるに至つたのである。特に朝鮮半島が我國の領土となつた今日に於ては、その國民性を知り、又實際的經營の方法を知るについても、此戰役の研究の必要な事は明であらう。然るに史料の缺亡及びその蒐集の困難の爲めに此大戰役に對する根本的研究が今まで行はれなかつたのである。博士が日鮮支の史料を讀破して、この空前の大事件の真相を究明せられんとしつゝあることは、誠に意義あることと言はなければならぬ。特に大正三年滿鐵歴史調査部の廢止後も公務の傍ら絶へず苦心して此研究を續けられた事は、本書の序に『大正七年以來古蹟調査の任を帯びて屢々朝鮮に渡り、其の間に或は京城に於いて舊奎章閣の群書を涉獵し、或は地方の舊家の藏書を探りて、新に獲得したる史料も鮮なからず。而して前稿を顧みれば敘述に論斷に、自ら意に滿たざるもの甚だ多かりしを以て、大正の末年、全く稿を改めたり。降つて昭和九年に至り、又其の稿本の一部に再度の補正を施し畢んぬ。今ま新に東洋文庫論叢として發刊せんとする「別編第一」これなり。』とあるに依て知らるゝのである。著者の研究發表の方針は之を正・別・附の三編に分けて刊行するゝ豫定であつて、先に

公刊された「文祿慶長の役正編第一」に於ては、専ら戰役の由來及び戰役開始以前の事情を究明されたのであるが、本書に於ては、

れてゐるのである。その内容を略記すれば、第一章第一軍乃至第三軍の京城進撃、第二章第四軍以下諸軍の動靜、第三章入京諸軍の動靜及び平壤占領、第四章黑田長政の黃海道經略、第五章加藤清正等の咸鏡道經略、第六章森吉成・島津義弘等の江原道經略の六章に分れ、附録として、東萊安樂院釜山・東萊二城陷落の圖についての圖版解説の一文をのせ、更に七葉の圖版と諸軍の行動を示す三枚の地圖とを挿入し、英文要約及び索引を附してゐるのである。東亞史上に於いて重大の意義を有する文祿慶長の戰役が博士の努力に依て真相が極められ、其の成敗の跡を明示せらるゝことは、歴史家にとつてばかりでなく、一般國民にとつても誠に有意義のことと思はれる。博士の一日も早く此の研究を完成さるゝことを希望する次第である。(今宮新)

### 文 瀾 學 報

(浙江省立圖書館出版)

從來浙江圖書館刊を印行し令名があつた浙江省立圖書館は、中國の學術を研討し、浙江の文獻を闡揚せんがために昭和五年文瀾學報第一卷を刊行し、翌十一年第二卷第一期第二期を出版するに至つたことは、學界のため寔に欣幸なことといはなければならぬ。文瀾は清代賜書を庋藏する閣名であり、浙江最著の文府である。

本書は内容頗る豊富、殊に浙江省の掌故學術に關する文獻が多い。第一卷の卷頭に於て浙江省立圖書館館長陳訓慈は晩近浙江省

撰述、鄧天一閣の修葺に就て述べてゐるが、一讀の價値は充分ある。張峯は文瀾閣四庫全書史稿と題し、約百五十葉に亘つて閣史を詳述してゐる。四庫全書研究家の看過することの出来ぬ文獻である。孫正容は南宋臨安都市生活考(上)と題し、位置、人口、食貨、市政方面より臨安の都市生活を述べてゐるが、卷を逐うて街坊、教育、娛樂、風俗、及び宮廷等に言及する意向らしい。其他柳詒徴の劬堂讀書錄、夏定域の吳越錢氏の文化、楊敏曾の黃梨洲先生遺書書後、李笠の校勘學の旨趣、黃紹箕遺稿散氏盤銘補釋、陶存煦遺稿姚海槎先生年譜等何れも一讀の價値がある。卷末文苑には今はなき章太炎の孫仲容先生年譜序及び孫太僕年譜序の一文があり、又詩人として著明な陳散原は馮君木墓誌銘の一文を載せてゐる。第二卷の内容紹介は省略するが、第一卷同様、目錄學、校勘學、書誌學等に關する記事が多い。尙本書が郷賢未刊遺稿を公にすることを一の目的としてゐることは寔に有意義なことといはなければならぬ。(宮島貞亮)

### 露西亞史講話

齊藤清太郎著  
明治書院發行

世界大戰以後ロシヤの研究が盛になり、我國に於ても多くのロシヤに關する書が刊行せられたのであつた。然しロシヤの通史に至つては殆んど見るべきものはなく、日本語にてロシヤ史を知らんとするには齋藤先生の大正十年に發行せられし露西亞史講話によるか、或は岡田宗司氏の譯せるポクロフスキイのロシヤ史等によるより他なかつたのである。共にあまりにも古い研究であり、

大なる變化のあつたロシヤのその後の歴史について知ることを得なかつたのである。この時にあたり齋藤先生が大正十年に發行せられし舊著を改訂せられ、帝大慶應等にて講義せられしノート等により新に露西亞史講話を發刊せられしは大に喜ばしい次第である。

本書は建國の初より説かれ、ペートル大帝よりニコライ二世にいたるロシヤ帝政華かなりし時代に就いて本書の大半を費されて詳しく述べられ、最後にソヴェエトロシヤのスターリンの獨裁政治まで説き及ばされてゐる。本書はロシヤの政治的變遷に重きを置かれ、ロシヤ政治史の觀があるが、西洋史特に近世史に興味を有する者、ロシヤに關心を持つ者にとつて必讀の書である。

(田中判三)

The French Revolution and Napoleon,  
by Leo Gershoy (New York, 1934)

フランス革命及びナポレオンに關する大小の著述は年々數多く出版されてゐるが、公平なる立場からすべての問題を論じ、一冊を以て大抵の參照には事を缺かない、といふ様なものを探し出すとなると中々困難である。本書はその序文に、この時代に關する新研究は絶えず續々と現はれるが故に、その悉くを採入れるに非ざれば新著は價値無きものとなるべきも、特殊な研究に一々没頭する餘暇なき讀者、研究者のため『新知識を及ぶ限り明瞭に、系統的に述べる必要』から書かれた、とあるによつて知られる如く、